

『幼児の音楽』抄訳 3

Abstract Translation of Alice Green Thorn's "Music for young children"3

アリス・グリーン・ソーン著 迫 共訳

要 約

アメリカの音楽教師、音楽家 Alice Green Thorn(1890-1942)による“Music for young children” (1929) の抄訳である。1935 (昭和 10) 年に米国コロンビア大学幼稚園師範科に留学した高森富士子 (1877-1968) らの訳により、教文館から訳書が出版されているが、元訳書は版が途絶えて久しい事などから、部分的に訳出しなおした。本書は第 3 章「リズム運動」と第 2 章「歌唱」に最も紙幅を割いている。

今回は第 4 章「楽器の使用」の抄訳を掲出する。本章の内容としては、楽器を用いた独奏と合奏の指導、楽器演奏による社会性の発達、手作り楽器 (幼児による楽器制作活動) などを含んでいる。

キーワード：米国、幼児音楽教育、環境、楽器制作、社会性

1. 解 題

本稿では、ソーン著『幼児の音楽』第 4 章「楽器の使用」について訳出を行った。今日、保育現場において楽器を用いた音楽活動や音遊びは一般的に行われているが、本書の記述からは、本書が刊行された 1920 年代後半の米国においては乳幼児の使用に適した優れた楽器を入手することは容易ではなかったことが伺える。一方、乳幼児の音遊びにおいて、日常的な周辺環境にあるものが素材として選ばれる様子は今も昔も変わらない。本章で紹介されるオタマやスプーンなどを打ちついたり、格子柵を棒で鳴らしたりといった「子どもの姿」は、今日のわが国の保育者がよく知るものでもある。子どもは周辺の環境に働きかけ、環境との相互作用を通して成長する。ソーンは乳幼児と小学生を対象に、単に音楽や音遊びの指導をただけではなく、いかにかれらの環境との相互作用を円滑で効果的なものとして実現させようかを念頭に置き、その手段として音楽や音遊びを活用したように考えられる。

本章では魅力的な手作り楽器に関する記述が見られる。これはコロンビア大学ティーチーズカレッジ付属校におけるソーンと同僚、コールマン (Satis N. Coleman) の影響が色濃く表れた箇所である。

コールマンは演奏法の指導が中心であった当時の音楽教育に、子どもによる楽器制作と即興的表現を大胆に取り入れた人物である。本章では、ブリキの缶や帽子の箱などを用いた打楽器や紙製のラッパ、簡易なヴァイオリン型楽器などを教師の補助を得ながら子どもたちが作成し、装飾を加えたり演奏したりする活動が写真とともに紹介されている。

『幼児の音楽』が刊行された 1929 年以降、ソーンとコールマンは共著で三冊のソングブックを刊行していく。その中には幼児が作曲した作品も含まれている。両者には長年にわたる親交があった。

また合奏による社会性の発達について言及があることも本章の特徴である。楽器を譲り合うことだけでなく、他の子の演奏を聞きながら、調和的な音を奏でる場面でも社会性

の獲得は重要な前提となる。また幼児ら自身から、集団で合奏したいと提案させ、その際の配置を考えさせるなど、教師主導ではなく幼児の自発性を大切に作る姿勢が見られるのである。

本章では乳幼児にとって楽しい音楽活動、音遊びについて、環境との相互作用を重視しつつ、創造的な表現と社会性の涵養を図る活動として位置づけている。このことは、今日のわが国の保育を考える上でも重要な視点と言えるだろう。以下、『幼児の音楽』第4章「楽器の使用」の内容について紹介する。

2. 音の実験

子どもの音楽への最初の手引は、なにかの音を実験することに始まる。子どもがごく幼い頃にこの興味ある実験に用いる材料は、自分の声や手足などである。乳児時代には自分で出せる様々な面白い音を聞いて、夢中になっている。喉をゴロゴロ鳴らしたり、クークーと言ったり、あるいは足で蹴ったりキャッキョッキョと叫んだりするのは、科学的な理由もあるが必要から起こってくるものである。

子どもは、筋肉のコントロール力が増すに従って、他の素材をだんだんと得やすくなるので、ガラガラやスプーン、鍋、棒、空き箱やオタマなどのような音をたてる素材を用いて、実験をするようになる。このコントロール力の発達によって、子どもは同じ素材を今までよりももっと効果的に扱うことを覚え、子どもの音の実験回数もさらに増すことになる。このような実験が、音を出すものに対する興味のそもそもの始まりであり、また将来、音の物理を学ぶために必要なことでもある。

子どもは自分で楽器を作ろうともするが、同時にまた他の人が作った楽器にも大いに興味を持つ。赤ん坊がまっすぐに、ちゃんと座れるようになるその時から、ピアノの実験には心を惹きつけられるものだ。子どもは機会を与えられさえすれば、鍵盤に触る動作や、

そこから起こる音に全身を集中させる。とても小さな子どもも、中空の管などを吹こうとして、はじめて端に口を当てて歌うと、自分の声が戻ってくるのでびっくりする。どちらかといえば、子どもは主として打楽器に興味を持つ。これらの楽器は最も扱いやすく、最もよく音を立てるからだ。子どもは皆ハーモニカや笛を好み、管楽器も時には試してみるのが、弦楽器は微妙なタッチやある程度の筋肉のコントロールを必要とするので、就学前の普通の子どものには難しいものである。子どもは四歳頃になるまでには、既に従来の楽器や自分自身で作った楽器についても、それがどのような音を発するものか、可能性を確かめる技能を少なからず持っているものだ。

以下に記した音に関する実験は、四、五歳の子どもの行った代表的なものである。この実験の中で私たちは、子どもが後日、楽器を作ったり、弾いたりするようになる熱心な興味の始まりを見ることができる。この音の遊びは、子どもたちの環境の奥にある要素が誘発したものであって、大人からの誘いかけによるものではないと考える。

1. スプーンで皿をリズムカルに叩く。
2. 空のブリキの缶を、歩道に打ちつける。
3. 鉄の格子を棒でかき鳴らす。
4. ブリキの缶の中でコマを回して、音楽的な響きを喜ぶ。この缶を音楽の箱と名づけた。
5. 木製の石鹸の箱を打ち鳴らす。行列の時にはこれを太鼓がわりに使う。
6. 二本の棒をリズムカルに打ち合わせて鳴らす。
7. 紙を丸く巻いてラップを作り、口にあてて歌の一節を吹く。

子どもが学校に行った時、教師は子どもの音に対する興味を認めて、その要求に沿うように務めるとよい。さらに教師は、学校の環境が、子どもの興味が表現できる刺激となる

ように努力するものだ。歌うだけ、他の人が出す音を聞くだけでは、子どもの要求の一部しか満たすことにならない。だから子どもは、色々な種類の楽器を使う経験をすることや、音響の実験を促すような素材を手もとに持つことが大切である。

3. 楽器を使う価値

以下に示すものは、楽器遊びと音の実験がもたらす有益な効果である。

1. 全ての楽器に対する興味と、楽器を使いたい、楽器を制作したいという期待を持つきっかけになる。
2. 楽器を使うことは、音楽的表現のゆるぎない形式だという気持ちを持つ。
3. 子どもは単純な楽器を使うことで、鑑賞においても技術においても、自分にふさわしいレベルの経験を得て、満足する。
4. 進歩的な音楽経験をj得るjチャンスを提供する。
5. 団体遊びが貴重な社会的習慣をj発達させるj機会となる。

次の楽器と材料は、幼稚園または一年クラスの子どもが使用して良い代表的なものである。

1. 合奏に使用する器具

太鼓/小太鼓 (スネアドラム) /中国小太鼓/木製ボウルを応用した太鼓/ハットボックスドラム (帽子入れの箱を応用した太鼓) /タンバリン/トライアングル/様々な種類の小さい鈴/様々な種類のガラガラ/シンバル

2. 独奏のみに使用される楽器 (正しく調律できる場合はこの限りではない)

シロフォン/ミュージカルグラス/マリンバ/スイスの鈴/ピアノ/アコーディオン/銀の笛 (各自に)

3. 子どもが扱j得るj機械楽器

蓄音機/ミュージカルボックス

4. 音響の経験の材料

木材 (様々な形と大きさのもの、例えば平たい木片) /棒/箱/ブリキ/厚紙 (大小) /へこんだ容器/ゴム紐/真鍮の管 (色々な長さに切ったもの) /紙の筒/大きな釘/蹄鉄/荷札/丈夫な紙

上の 1.2.3.に掲げたような、子どもが使う楽器を選ぶためには、次の基準を心に留めておかなければならない。第一に考えるべきことは、楽器が扱いやすくてはならないということである。軽く、楽に取り扱えるものがよい。第二には (これは第一と同様に大切であるが)、その楽器が気持ちの良い正確な音を出すものであることだ。これは大いに注意して選択することが必要である。安価な楽器になると、不幸にして妙な音を出す物が多い。ときには音色が耳障りになることもある。安い木琴はなおさら調子はずれのものが多い。貧弱な音を出す劣った楽器がたくさんあるよりは、良い楽器が少しだけあったほうがどれほど良いだろうか。調子のあった良いシロフォンは良いピアノと同様に、長く使える教材である。良いシロフォンを購入する費用は余計だと思われるが、実は長く使用に耐えるということと、音の美しさによって、十分に価値のあるものである。

楽器の選択に際して第三に考慮すべきことは、耐久性である。四、五歳の子どもは楽器の取り扱いが非常に手荒なので、どのような使い方にも耐えうるほど十分に丈夫な楽器でなければならない。一台の質のよい太鼓は、安物が五つ六つあるよりも長く持ちこたえるし、また深みのある音を発する。安価なベルはすぐにバラバラになってしまうから買う価値はない。

4. 手作り楽器

ミュージカルグラスは、教師に音調の高低についての一般的な感受性があれば自分で組

み合わせることが出来る。従来はワンコインショップで音階の順に配列できるコップを買うことができた。しかし実は、音を高くしたり低くしたりするために水を加えないでも、そのまま望み通りの音を出すコップを使った方がはるかに良い。水でコップの音を調整するやり方は、小さい子どもには難しすぎるからである。小学生の子どもには、そのようなやり方は貴重な音楽的経験となる。ミュージカルグラスを並べる際、幼稚園の子どもでもそのコップの出す音が前の音より高いか低いかは分かる。従って音階の順序に並べようと思えば、どのコップをどれとどれの間に置くかということも分かる。学年の初めにはあまり混同しないように、コップを三つだけ（音階の最初の三音）用いるとよい。子どもがこのコップの使用法に慣れるにつれて、メロディー作りの可能性を多くするために、コップの数を増加していくのである。

教師はマリンバやシロフォンを手作りして、子ども達にもこの経験に預かる機会を与えてやるとよい。子ども達は長さの異なる木片を叩けば音に高低が生まれることを知って喜ぶものだ。教師はマリンバを作るために木を切ったり、カンナをかけたりしているときに、一つの木片をどれとどれの間に置くべきかを決めるのに、子どもに手伝わせたり、またその木片の音と音階の音とを比較させる機会を与えてやるべきである。教師の作る楽器の多くは当然五歳や六歳の子どもが作ってみるには難しすぎるが、しかし教師が子どもに使用させるために作る楽器については必ず、その制作過程を子どもに観察させる機会を与えるべきである。

子どもたち、特に一年クラスの子どもの場合は合奏に用いるための太鼓を、帽子の箱を使って自分で作り、これを装飾することができる。また小さな箱の中に小石や小さい鈴を入れ、その箱を華やかな色で装飾すると、簡単な形の米国先住民のガラガラも作ることがで

きる。幼稚園の子どもはもちろん小学一年生でさえも、音を発する教材の制作を一人でさせると、非常に粗末な楽器が出来上がるものだ。これはこの年頃の子どもには、道具の取り扱いに必要な熟練がないからであるが、楽器を作ろうとするこうした試みは、子どもの音楽発達上で非常に重要なものである。

5. 楽器を使い始める

学年の初めには子どもたちが楽に楽器を手にすることができるように、教師は低い棚を選んでそこに楽器を置いておくと良い。特に最初、子どもたちが部屋の中のいろいろな材料の置き場を見覚えるまでは、なるべくテーブル上に、二つ三つずつの楽器を取り出しておくが良い。そうすれば子ども達は、それを自由に使う機会を得ることができる。必ずしも楽器をグループで使用しなければならない理由はなく、また必ずしも何らかの音楽伴奏に合わせなければならない理由もない。ただ必要なことは、子ども達が自由に楽器の実験ができることである。そうする間に楽器をいかに取り扱うかも覚えるし、また楽器の出す音の可能性にも親しみ、慣れるのである。みんなが合奏に取り掛かる前に、あらかじめこの経験を与えられておけば、いよいよの時になって、教師が子どもに「あなたの楽器を鳴らさないで」とか「音楽が始まるまで待ちなさい」とか言う必要はなくなるだろう。また楽器の合奏する時には教師はあれこれとたくさん指示をしなければならぬが、これも子どもが楽器に自由に触れる機会を、事前に存分に与えられていたならば、全く不必要なことになる。子ども達はまだ十分用意ができていないうちに、組織された経験の中に拙速に飛び込まれることが多いのである。

こうした実験的な経験は、入園後の数週間後に始めるべきである。学年の初めには子どもたちは大きな音を聞くと、簡単に刺激されてしまう。楽器を与えるのは学校の様子に慣

れ、またいくらか自己コントロールができるようになるまで待った方がよい。このような経験の時間は、最初は五分から十分に限らなければならない。時間帯は朝早く、子ども達が登園してくる頃がこうした実験には都合のよい時である。この時間には規定の授業もまだ始まらず、そこにいる子どもも少ないので、子ども達それぞれがどのような実験をするか、またどのような楽器を選ぶか、また楽器に興味を感じている子どもと何の興味も表さない子どもたちもいることを観察するのは、教師にとってなかなか興味のあることである。教師は常に背後にいて、ずっと子どもの反応を観察し、必要なときはすぐに援助を与えなければならない。また、このような経験があまりに大きく興奮させるようではいけない。

幼稚園で使用する最初の楽器は、最も扱いやすいものでなければならない。子ども達はそのような楽器をそれぞれで十分に実験すると、今度は小さな団体になって一緒に弾きたいと言うだろう。団体演奏をしたいと思いつくのは、子どもたち自身であることがままある。それは以前、楽隊を見たり音楽会などのオーケストラを聴いたりしていたからである。団体で楽器を上手に弾くには、それが大人数であっても少人数であっても、とにかく子ども達はまず自分の演奏を全体の演奏に適合させることを学ばなければならない。みんなが同時に弾き始め、また止まることも学ばなければならない。また、自分の弾いている楽器の音を、他の楽器の音や伴奏の音と同じタイミングで出せるように弾くことも学ばなければならない。

6. 合奏の指導について

合奏のグループは、最初は人数を少なくする。まずひと時に、子ども五、六人以上にならないようにしたほうがよい。子どもの熟練が進むにつれて、人数も増やしてよい。グループの人数は子どもの能力の程度や、また組

み合わせる音の質と量によって定めるべきである。十五人くらいが、子どもと一緒に演奏するのにちょうど良い集団である。多くの子どもと一緒に演奏させたとしても、特別な効果があるわけではなく、かえって多くの弊害が出る。十五人以上の子どもと一緒に演奏すると、子ども一人ひとりの反応を聞きわけることも、必要な援助を与えることも難しくなる。くわえてグループが大きすぎると、全体としての音響が不快になりやすい。

感じの良い結果を得るために必要な楽器の数と種類は、教師と子どもと一緒に決めてよい。軍隊の音楽に必要な楽器の種類の割合と、モーツァルトのメヌエットに必要な割合とは当然違う。幼稚園の年齢の子どもは、そのような問題を決定する能力を持っているものである。そのような決定をすることによって、貴重な音楽の経験を習得しつつある。もし楽隊の楽器を二十五個買い求めるなら、次のような楽器の割合が参考になるだろう。なお二十個の楽器を購入する時の割合もあげよう。

	総数 25	総数 20
太鼓	2	1
シンバル	2	1
トライアングル	6	5
ベル	7	7
ガラガラ	3	2
タンバリン	5	4
合計	25	20

幼稚園または一年クラスにおける団体演奏の発達は、その団体の能力によるものである。その組織もまた必要に従って、教師と子どもの力でようやく完成されていく。結果を早く得たいということのみを目当てにして、子どもの活動を計画し、また命令するような教師は、その活動の中で子どもの成長を促すような十分なプロセスを踏んでいない。この

ような教え方は、音楽的活動だけでなく何においても同様に嘆かわしいものである。大人の組織に近い楽隊は、子どもよりもむしろ教師の方で余計に計画した結果であるに違いない。この楽隊は学年の終わり頃には、子どもたちがその年の間に話し合ったり経験したりしたことの総和として生じているはずのものである。幼稚園の子どもは組織ということについては何の考えも持っていないが、組織することに少しでも携わることによってそれを学ぶ機会をもつべきである。例えば子ども達は初めて一緒に演奏する時には、たいてい聴衆や楽隊の他の演奏者の位置関係などを気にせず、ひと塊になってしまうものである。しかししばらくすると、もっと他の座り方をすれば演奏者に広い場所を用意できるし、同時に聞く者からも良く見えるということを実感するようになる。このようにして子どもは教師とともに、この組織の経験に参加しながら、これを解決できるようになる。このようにしてこの楽隊は、多くの経験から生じた産物となるのであって、学年の最初から教師によって計画された技術の形式的な表現ができるということはあるにない。

団体演奏には、発達の可能性が無限にある。幼稚園におけるこのような組織は、他の同じような組織の導入に過ぎない。学校音楽隊やオーケストラもこのような小学校における音楽経験がさらに一層発達したものに他ならない。一年次の経験から二年次に進むべきプロセスは、子どもの進歩と歩調を合わせるべきものであり、決してこれに先走ってはならない。団体演奏は子どもにとって愉快的な経験を与えるだけでなく、また音楽的な成長の機会を与えるべきである。幼稚園や小学校の楽隊に関して、教師も両親もこれを音楽教育の真面目な局面とみなさなければならない。公開の音楽会において、余興のために用いたり、子どもが可愛いからといって利用したりするなどはもってのほかである。

団体演奏の発達の可能性のあるものを次に示す。ここに示すものは幼稚園または小学校一年クラスで採用して良いものである。この二つの間のどこに分岐点を置くかはそのクラスの子どもの過去の経験と現在の能力によって定めるべきものである。もしこの楽隊が音楽的成長の一方法として、教育課程に入れられる十分な価値があるならば、一年クラスの経験はもちろん、幼稚園の経験よりもさらに一步を進めたものでなければならない。

7. グループに分ける

1. 団体演奏が始まる前に一人ひとりが楽器を試してみる。
2. 小グループの者が一緒に演奏する。残りの子どもは順番が来るまで聞いていると良い。学年の初めは、小さい子どもにとっては、少しの間も「聞き手」となっていることは難しいので、最初の二、三回は子どもを小さなグループに分け、みんなが分担して何か活動することにした方がよい。もう一人の教師が演奏に加わっていない方の子どもを受け持ち、何か他の種類の経験をさせるのもよい。ただし、他に教師がいない場合は必要上小グループの子どもたちの演奏の時間を短くして、「聞き手」となっている子どもたちにも「演奏者」となる機会を与えなければならない。
3. クラスの半数が演奏し、半数が聞くことにしても良い。つまり子どもは日数が経つに従って自己コントロールができるようになるので、それまでよりも長く注意を集中できるようになる。そのためクラスの半分が参加し、半分が聞くということもできるようになる。また聞き手となっている子どもたちは、たとえ演奏者でなくても、自分たちも同

様に参加することができる。教師が子どもの注意力をある一点に向けるよう促せばよい。例えば「曲のアクセントのところで太鼓が鳴るかどうかが気を付けておきなさい」（一年クラス）または「皆が一緒に初められるか、また一緒に止められるかを見ていてごらんなさい」などというものである。

4. 色々な楽器を、独奏や二重奏、三重奏、四重奏などにして弾いてもよい。演奏者は子どもまたは教師が選ぶ。弾きたい気持ちを抑制して、他の者に機会を譲ることは、参加していない子どもには貴重な社会的訓練である。どの楽器を弾くかは大抵用いる音楽の形によって決定される。例えば楽曲のある一部分は、トライアングルによる表現を必要とするが、さらに他の部分は太鼓によって表現されなければならない等である。

5. 楽隊の指揮者が必要であると子どもたちが言い出すかもしれない。そのような提案が子どもから出てきた時には、みんなで指揮者に求められることについて話し合い、クラスの中から一人を選ぶとよい。しかしこの指揮者も、実はその楽隊を劇的にしたり、外見を写實的にしたりする以外には楽隊に貢献するところはない。またこの指揮者を演奏者の一人としてみるとときにはその貢献は皆無である。なぜならば子ども達は音楽の伴奏のリズムについていくのであって、指揮者の指揮に従うわけではないからである。

さて、団体における楽器の位置について考えよう。

1. 子どもたちは初めて団体になって演奏する時には、楽器の種類には全く無頓着に、みんなひとかたまりになってしまう。こ

れはごく自然な状態であり、こうしてはいけないという理由は全くない。団体演奏の初期における主な条件は以下のものである。

1. その経験を楽しむこと。
2. 必要な社会的順応を学ぶこと。
3. 楽器の扱い方を学ぶこと。

2. この団体演奏の経験を数回行った後で、やがて子どもたちは同じ形の楽器を持った者同士と一緒に集まった方がいいと提案するだろう。教師からはほとんど何の助けも受けなくても、子ども達はそうすることに気づく。子どもたちは本当の楽隊やオーケストラの楽器のグループ別の絵を見ることを喜ぶだろう。極めて気持ちの良い音調の組み合わせが出来るまでは、ときどきこの種類別の組み合わせを変えるのもよい。

8. 合奏のための音楽

学年の初め頃は楽器をテーブルの上に並べて、子どもたちに自分の弾きたい楽器を選ぶチャンスを与えてやらなければならない。また一年の内のいつかは、どの子どもにも手に入る種類の楽器は全て一度使ってみるチャンスを与えなければならない。太鼓は合奏に用いられて一番人気のある楽器であるが、数が限られているので社会的順応が必要となる。教材を譲り合う機会を提供するような社会的経験が、一人一人の子どもに必要である。

ときにはクラス全体で、ある子どもを選び、ある楽器を弾かせるということをしていても良い。弾く人の選択はその子どもが上手だからということでも良いし、またある子どもは今までもよりももっとチャンスを得る必要があるからということでも決めても良い。

合奏の伴奏として使われる音楽は、他のいずれの音楽経験のための音楽とも同様に、十分な注意をもって選ばなければならない。ま

ず優れたもので、形式は単純なもの、そして変化に富み、一年の間に次第に難しくなっていくのでなければならない。これは子どもたちが音楽上のある思考を伝えるために用いる、様々な形の音楽を解釈することによって、音楽的に成長を遂げるためである。

一年クラスの子どもで、ことに幼稚園の経験を経た子どもたちは年下のクラスよりはずっと巧みに音楽を分解し、また解釈することができる。また楽器の取り扱いも上手にできるし、団体の経験に参加することにもより優れた手腕を持っている。

音楽は子どもの進歩と歩調を合わせなければならない。子どもが演奏してきた音楽に対して、もはや新しい解釈の可能性がないと思えるならば、すぐに新しい音楽を与えるべきである。その新しい音楽とは種類の異なった反応を刺激するものであることはもちろんだが、同時に子どもたちが前から親しんでいる要素を含んでいなければならない。

音楽に対する子どもの反応は次第に向上しなければならない。これは色々な方法によって実現される。例えば一年間に与える音楽はだんだんと進歩した反応を刺激するようなものを、選択するようにすべきである。教師はある子どもを選んで、他の子どもの助けになりそうな反応を繰り返させてみることも良いし、また共通なある困難についてみんなで話し合うようにするのも良い。あるいはもっと良い反応を直接に提示しても良いし、また子どもの現在の能力ではやってみることさえおぼつかないが、やがては到達しそうな、いかにも感激を与えるような演奏を見聞きさせる機会を持つのも良いことである。

9. ひとりで楽器を弾く経験

幼稚園や一年クラスの子どもたちは、合奏に用いる以外の楽器を手にする機会がなければならない。これらの楽器について、シロフォンはことに典型的なものである。音階の中

の様々な音を発するこのような楽器は、基本的に単独で用いるべきであって、調子を合わせてからでなければ他の楽器とは一緒に使用してはならない。

普通の五、六歳の子どもは、ピアノまたはシロフォンで簡単なメロディーを弾くことができる。最初はその弾こうとする試みは、単なる実験である。別にメロディーを弾こうと努力しているわけではなく、ただ鍵盤を弄ぶのが面白いのである。子どもは満一歳にもならないうちに、もうピアノの前に座って鍵盤を打つことに興味を感じている。二歳にもなれば静かに弾くことを教えられるが、それでもまだ出来るだけ大きな音を出すことを面白がる。三、四歳になると手の位置とか鍵盤の上の手の動き具合などについて、大人の真似をし、ときには鍵盤を一つずつ弾くこともある。すべてこれらの段階は重要なものであり、子どもはこの段階をたどっている間、絶えずピアノを弾く機会を与えられなければならない。しかし家族には大人もいるので、この時間は限られている。子どもが楽器を占有するのはいけないが、子どもが弾いても良い時間を定めておくべきである。家庭において子どもたちは、自分の楽器を持っているかもしれないが、それはピアノの代わりにはならない。

六、七歳の子どもは楽器でメロディーを弾いてみることを非常に喜び、自分の知っている歌を弾こうとする。小さい子どもは楽譜などについては知識がないので、まず歌を歌うことを覚え、次に記憶をたどりながらその歌をシロフォンやピアノ、ミュージカルグラス等で弾こうとする。また自己流のメロディーを創作したり即興したりすることもある。音楽の能力のある子どもであれば、歌の調子をたやすく楽器で弾くことができる。子どもはほとんど信じがたいほどの正確さをもって、正しい音程に近いものを弾くことができる。心に思い描くメロディーと、今弾いている音を比較して、果たしてその音が正確であるか

どうかを判断することができる。弾いている音が自分の思っている音よりも高いか低いかということ、またその違いの程度までも分かっていることがある。しかし、普通一般の子どもはそれほどまでに自信はないので、正しい調子を見いだすためには、弾いては誤りを発見するという方法で実験してみなければならない。子どもは他人のメロディーを弾くことは難しくても、自分自身でメロディーを作ることができるので、このようにして実験すれば、音楽上にもメリットが大きい。たいいての楽器は1オクターブの長さに揃えてあるから、子どもは音階の何たるかについて、また音階の中の音の関係について、何らかの概念を持ち始めるようになるだろう。このようにしてメロディーを試してみたり、同時に自分のメロディーを創作したりする機会を得る。

楽器は室内の取り出しやすい場所に置いておかなければならない。また子どもが他の音に煩わされることがない静かな、ある一定の時間を一日の間に定めておいて、楽器の使用の時間に当てるべきである。もし楽器を置けるような静かな部屋がとなりがあると、なおさら良い。そうすれば子ども達は一日のうち、いつであっても自由に行くことができる。

メロディーを弾くための準備として、子ども達に簡単な歌をたくさん歌い習わせるようにしておかなければならない。そして後日、子どもたちが自分自身で弾き得るようなもので、まず音階の最初の三つ四つあるいは五つの音だけで用いたもので、その短いメロディーの数種類に数字を付けて示す。音階の第一の音を1、第二を2として、以下それに準じて行く。数字の上に記号があるものは1より低い音を表すものとする。

幼稚園児は、耳で聞いただけでこれらのメロディーを弾くことができる。初歩の子ども達は自分達のメロディーがこのように紙に書かれるのを見て喜ぶものである。ミュージカルグラスを前に使ったことがある子どもたち

- 3 3 2 1 3 3 2 1 3 3 2 2 1
1. We are glad that Jane is back so we can play with her. (Key of G.)
- 3 2 1 3 2 1
2. Hot cross buns, hot cross buns. (Key of G.)
1 1 1 1 2 2 2 2 3 2 1
One a penny, two a penny, hot cross buns.
- 1 5 1 1 1 5 5 1
3. Ding dong bell, pussy's in the well. (Key of C.)
- 1 5 1 5 3 3 2 2 1
4. Ding, dong, ding dong, hear the church bells ring. (Key of C.)
1 5 1 5 3 3 2 2 1
Ding dong, ding dong, now the people sing.
- 1 3 5 5 4 3 2 1
5. Run, run, run, run my pony run. (Key of G.)
- 5 3 5 3 4 3 2 1
6. Cuckoo, cuckoo, up in the clock. (Key of G.)
- 5 6 5 3 5 6 5 3 3 5 3 2 1
7. Pumpkins mellow, lanterns yellow, All for Hallowe'en. (Key of G.)

図1 : (Thone, Alice Green.1929, *Music for young children*. C. Scribner's sons.: 127
より抜粋)

は、この数字の関係をすでに知っているの、こうした耳で聴いたメロディーを演奏した後には、それを数字で書くようにするべきである。

この数字で表された音階の中の、音の数学的な関係がはっきりわかってくると、子どもは新しいメロディーを読んだり、また自分自身のメロディーを書き綴ったりすることを楽しむようになる。しかしこの仕方メロディーを書き始めようとするとき、大抵の子どもは多少の援助を必要とする。普通の教師には、このための十分な時間を見いだすことが難しい。よって学校の時間中にできるだけの援助を与えることと同時に、家庭においてもこのような音楽的経験を進めるために、子どもたちの両親に対して聡明な提案ができなくてはならない。この点に関してはすべての教師も親たちも、コールマン婦人の『家庭における創作的音楽』(Mrs. Satis N Coleman's "Creative Music in the Home")を資料として用いるのがよいだろう。

10. 学校内での楽器制作

子どもが音響を経験するために用いる素材は、十分に取り出しやすくしておかなければならない。幼稚園や一年クラスには、先に

表示したような素材を準備すれば十分だろう。一年クラスの子どもは、道具の使用についていっそう多くの経験があるので、よりまとまった楽器を作り出すことができる。幼稚園でも、ある子どもは教師がさほど手伝わなくても、いろいろな形の太鼓や簡単なラッパ等を作成することができる。また弦の代わりにゴムバンドを使ってタバコの箱の弦楽器を作ろうとする子どももいるが、もっと複雑な楽器を作ろうとするなら、出来上がるまでの大部分は教師が考えてやらなければならない。材料が不足したり、道具が得られなかったりする場合は、少し手伝えば子どもにも作れるような簡単で使用に適した楽器についてのヒントを教師が与えて、子どもに作らせるのがよいだろう。しかし幼い子どもが長い間、何度も実験を失敗するのをそのままに放っておくと必ず興味を失ってしまう。だから子どもが理解し得る程度に教師が助言をすれば、子どもにも扱えるものを作るという目的を、より早く実現することができるだろう。ずっと小さい子は、楽器を制作するよりも、それに触れてみるのがもっと大切である。そのため、下級生の弾く楽器を上級生が作っている学校もある。

11. 一年クラスでの実験

次の実験は一年クラスで試みられたものである。ヘンリーが「太鼓を作りたい」と言った。音楽の先生は「それでは太鼓作りを手伝いましょう」とは言ったが、それ以上は何もしなかったし、子どももそれ以上に乗り気にもならず、そのままになっていた。クラスの担任教師は、以下のような点について知りたいと考えた。

1. 自分が手伝ってやれば再び興味を待たせられるだろうか。
2. 他の子どもも楽器を作ることに興味を持っているだろうか。
3. 楽器を作っても使用に耐えるだけ丈夫で、

また子どもたちが満足できるものになるだろうか。

そこで第一に、材料を集めることにした。教師はタバコの箱や厚紙でできた小さなチーズの箱、小さい帽子の箱 2 個、コーヒーの缶 4 個、深さ 10 インチ直径 6 インチのブリキの缶（簡易食堂の支配人が喜んで提供してくれたもの）などを集めた。これらの材料の他に教師はさらに小さな鈴をワンコインショップで求めた。紐、絵の具、厚い荷札、木の合釘なども材料の一部である。

これらの材料が揃ったので、教師は子どもたちに「男の子が太鼓を作ってみたいと言っていたのを聞きましたよ。他にも誰か楽器を作ってみたいと思う人があったら、ここにある材料はどれでも使っています」と言って材料を子どもに見せた。子どもたちは乗り気になって大部分の子どもが「太鼓を作る」と言った。太鼓をはじめに思いついたヘンリーはその日は欠席だった。その後、子どもたちは材料を置いておくのに都合の良い場所を定めた。

2 週間経ったが、集められた素材には誰も触れていなかった。部屋は非常に狭く、子どもたちは箱のそばを歩いたりまたいだりして、素材を目にしてはいたが、子どもたちには何の影響もなかった。もっとも、この時には面白い運動遊びが行われていたし、子どもたちの多くはすでに、他の制作物に熱中していた。

2 週目の終わりに、ヘンリーは大きなブリキの缶を手にとって、厚紙を上にかぶせ、紙を留めるために周りにゴムバンドを巻きつけた。また太鼓を首にかけるために紐をゴムバンドでくくりつけた。だが、叩きはじめようとすると紐が外れて太鼓は落ちてしまった。そこで教師は、缶の側面に穴を開けてそこに紐を通してはどうかと提案した。ヘンリーは次の日、この言葉通りに紐を通した。そして太鼓を赤い絵の具で塗り始めたがどうしても側面には絵の具がつかないので、太鼓の周り

に紙を貼ってその上に彩色することに決めた。次にまた太鼓のばちを二本作った。

翌々日、教師はヘンリーに、次の集まりの時にその太鼓を他の子どもたちに見せるように言った。子どもたちはとても興味を持ち、三人の男の子はすぐにコーヒの缶で太鼓を作り始めたが、その太鼓の上に紙をかぶせるのには教師の手を借りなければならなかった。

次の1週間、他の制作物の仕上げをしていた四人の子以外は、クラス全員が皆、何かの楽器制作にとりかかった。五、六人の子は、家から小さな缶やガラス瓶や箱などの材料を持ってきた。

組には二十六人の子どもがいたが、次のような楽器ができた。

タンバリン 3 個 太鼓 12 個 色々な種類のガラガラ 5 個 タバコの箱のヴァイオリン 1 個 紙ヤスリを貼った木片 1 つ

三人の子どもは二つの楽器を作り、また他の一人は家でお父さんに手伝ってもらって太鼓を作ってきた。

楽器ができたときには、子どもたちはピアノの伴奏でこれらを演奏した。ピアノを習っている小さな女の子は、たびたびグループの演奏者に取り巻かれてピアノの演奏をした。また一年生も幼稚園にやってきて、子どもたちのために演奏した。数人の子はコールマン夫人の『家庭における創作的音楽』の「インドの雨のダンス」(“An Indian rain dance”)という章を大きく参考にし、また感銘を得ていた。この章にはいろいろな種類のガラガラが説明してあり、図の記載もある。

楽器を作り上げようとしている時、話し合いの時間をもったが、その時には教師も子どもも二つの目標を心に留めていた。第一は楽器をできるだけ丈夫に作ること。第二は楽器の音色と装飾に関して、できるだけきれいに作るということであった。担任教師は次の理由でこの実験が実に価値あるものだと感じた。

1. 子どもたちが音響に対して興味のある実

験をする機会を得た。

2. この経験の過程で、子どもたちは何をするのか、またどうしてするのかなど、細かく教えられたのではなく、必要のあるときには教師の手を借りたが、後は初めから終わりまで全部自分たちの考えで行ったので、精神的にも大いに刺激になったはずである。
3. 子どもたちはこの楽器を使用して大いに喜んだ。
4. 自分たちで楽器を作る機会を得たので、他の楽器に対してもより鋭く見分けがつくようになったことなどである。